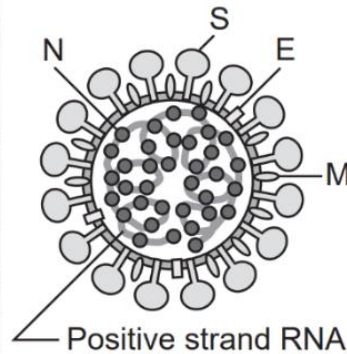
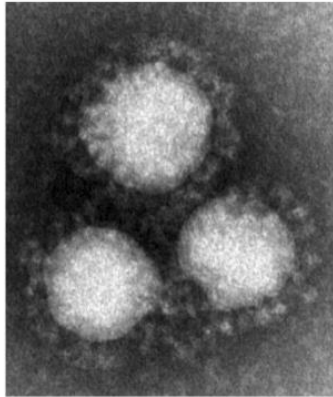


新型コロナ禍、ハットしたこと

地球村でウィルスと共生する!?

—地球市民の書棚から③⑨

地球市民 大村 昌宏



新型コロナウイルス
2019-nCoV
国立感染症研究所 HP

新型肺炎（新型コロナウイルス感染症）の脅威にさらされている。日本国内でも市中感染が始まり、誰もが感染のリスクがある。社会、経済活動での影響は計り知れない。

情報も氾濫、混乱している。パニックに陥る方も出ている。ウィルスは目に見えない、得体の知れないものは恐ろしいものだ。自分自身の身を守るためにも、少し基本から学び直してみたい。物事は、根本を抑えれば見えてくる。

危機、リスクに直面すると、どんなに繕っていても地金が出るものだ。個人においても組織においても。現在進行形の新型肺炎禍にあってハット気づかされたことが幾つかあった。

パニック？経済危機、東京五輪

昨日、3/14 に安倍首相が今回の感染症についての2回目の記者会見を行なった。聞いていて唾然とした。「やっています」の羅列だったからだ。「やってる感」の演出をしている時ではないはずなのに。

今、行政府の長に求められるのは、起きている

危機「リスク」はどのようなものか、どのように認識しているのか、どう対処しようとしているのか、現状認識と見通しを表明し、国民に協力を求めることだ。

「リスク管理」にあたっては、「最悪の事態」を想定する。市中感染が始まっている今、最悪、日本国内においても数千万人が感染する可能性もある。国民の命、安全を守るために医療崩壊をどう防ぐか。感染により重篤化が懸念される高齢者や基礎疾患を持つ方をどう守るのか、具体策が必要だ。「社会生活の混乱」と「経済活動の萎縮」をどう建て直すのかも火急の課題だ。もちろん開催の迫っている「東京五輪」の見通しについても・・・。

リスク・コミュニケーション

「一所懸命やりました、その先へ」 岩田健太郎（医師）さんのフレーズを思い出した。岩田さんは世界の現場で、感染症とそれに伴う危機に対峙してきた方だ。岩田さんは極めて実践的だった。卓上の計画で良しとする官僚達の作文とは対比を

なす。

岩田健太郎 著 「感染症パニック」を防げ！リスク・コミュニケーション入門」 2014年 光文社

リスクを見積る、リスクに対応する

今、リスク・コミュニケーション、リスク・マネジメント、リスク・アセスメントの手法を活用する必要がある。リスクの見積り、リスク・アセスメントにおいて、誰にリスクがあるのか？何人ぐらいに被害が生じるのか？どのような被害がどのくらい生じるのか？いつまでリスクが続くのか？がより具体的に検討し示さなければならない。

パニックと不感症 危機に際して、「恐れ過ぎ」でも、「楽観的過ぎ」でもよくない。「どれくらい恐れる」のか、きちっと伝えることが大事だ。リスクをどう捉え、伝えるかだ。

発熱や倦怠感は・・・

「自宅での静養」が、発熱の際、求められている。院内感染や医療崩壊を防ぐための措置なのだが、不安に思った方がいるのではないか。日本社会では、「熱が出たらお医者さんへ」が当たり前になっているからだ。しかし、普通の風邪なら、栄養をとり安静にしていれば数日で回復する。本人の自然治癒力によって回復するからだ。医者は診察し、症状の原因に対して対処、自然治癒力を助けるにすぎない。今回の新型コロナウイルスについても健康な大半の方は、知らないうちに感染し、知らないうちに回復すると言われている。

「進化から病気」を見る考え方がある事を柄内新(理学学博士)さんから知った。発熱については、「身体が設定体温を上げるのは、進化の過程で獲得した、ウイルスとたたかうための生存に有利な

性質である。」という考え方だ。「倦怠感」についても「ヒトに安静を強いることでそのエネルギーを発熱や防御反応に振り向けることができる「有利」な性質だ」と。もちろん高熱が続けば、ウイルスをやっつけるどころか、自らの脳等の臓器が危険にさらされることもある。その場合は医師の診断による対処が必要だ。いずれにせよ素人判断で熱が出たら安易に「市販の風邪薬」を飲むのはやめた方がいいようだ。かえって病気をこじらせることがある。

柄内新 著 「進化から見た病気「ダーウィン医学」のすすめ」 2009年講談社による。

ウイルスとは何か？

ウイルスとは何かについて、山内一也さん(農学博士)。「地球村で共存するウイルスと人類」を読み直した。狂牛病(BSE)の混乱時、山内さんのお話しが腑に落ちたことを思い出した。

「ビールス」or「ウイルス」？ 以前は、ビールスと言っていたような気がする。興味深い経緯があった。1953年に日本ウイルス学会が設立された。その二年後、日本医学会が医学用語を整理した際、一方的にビールスという用語を採用。それをきっかけに、マスコミがビールスという用語を用いるようになり混乱が始まった。一方、ウイルスの名を付けた研究所が相次いで設立された。1965年に日本ウイルス学会が、日本新聞協会にウイルスの名称を使用して欲しい旨、申し入れ。その後、ウイルス名称が次第に普及し今日に至っている。ウイルスはラテン語で病毒の意味で、中国では今でも「病毒」が使われている。

「細菌」と「ウイルス」の違い 肉眼では見えない微生物の一種だ。細菌は、顕微鏡で見ることができる。ウイルスはさらに小さいため電子顕微

感染症と文明

鏡でしか見えない。細菌は自己増殖できるが、ウイルスはできない。ウイルスは、遺伝情報をもつ DNA もしくは RNA を持つが代謝機構やエネルギー機構を持っていない。そのため、宿主となる細胞に侵入してその代謝機構を乗っ取って始めて増殖できる。ウイルスは外界に置かれたら数分から数時間で死滅する弱い存在だ。しかし宿主の細胞の中ではすざましい増殖力を持つ。増殖の際、変異が起きやすく「新型」が生れやすい。一方、人間は、既存のウイルスに対しては免疫を持っている。「新型」には免疫がないため痛い目にあうことになる。

「ウイルス」と「宿主」との関係 面白いのは「宿主」との関係だ。ウイルスが生き続けるためには宿主が必要だ。宿主を殺してしまつては元も子もない。強毒性のウイルスは、一定の範囲で感染しても宿主とともに存在できなくなり自然淘汰されていく。宿主との関係では共生がウイルスの生き残り戦略だ。全ての生物にウイルスは寄生している。

生物進化でみると、ウイルスは 30 億年も前から生きる大先輩だ。私達の体には、数兆の微生物(原虫、細菌、ウイルス)が共生、生息していることを忘れてはならない。

ウイルスの役割を見直す 山内さんは、ヒト内在性レトロウイルスの役割を指摘している。このウイルスが、母親の体内の胎児を守っている可能性があるという。さらに海は、ウイルスの巨大な培養槽になっており、これが地球温暖化の原因である炭酸ガスと関係しているという。ウイルスの世界はまだまだ分かっていないことが多い。

山内一也 著 「地球村で共存するウイルスと人類」
2006 年 日本放送協会

新型コロナウイルスが、なぜ世界的な脅威となっているのか。感染症により人類は何度も多大な被害を受けてきたからだ。今から百年前、1918 年～1919 年にかけて流行した新型インフルエンザ(スペイン風邪)で 5 千万人～1 億人の死者を出している。第一次世界大戦末期に発生したこの感染症は、軍隊や難民の移動とともに世界に広がった。今日、世界交通の進歩はこの比ではない。

「文明は感染症のゆりかご」と山本太郎さん(医学・国際保健学博士)は言っている。農耕と定住の開始が感染症をもたらした。採集狩猟時代に移動していた人類は小集団で感染症の余地はなかった。農耕を始め定住し、大きな集団になるにつれ感染症の脅威にさらされるようになった。しかも感染症は、家畜起源のものが多い。麻疹はイヌから、天然痘はウシから、インフルエンザは、水禽(アヒル)、百日咳は、ブタ、イヌからだ。

「感染症と文明」の関係について山本さんは次のように整理している。第一に文明が「感染症のゆりかご」として機能した。第二に文明のなかで育まれた感染症は、生物学的障害として文明を保護する役割を担う。第三に文明の拡大を通して周辺の感染症を取り込み、自らの疾病レパートリーを増大させる。第四に疾病の存在は社会のあり方に影響を与える。

21 世紀には「共生」に基づく医学や感染症学の構築が求められている、と岩田さんは結んでいる。

山本太郎 著 「感染症と文明 共生への道」
2011 年 岩波書店